



浄土真宗本弘寺婦人会だより

平成19年3月

第23号

老体を迎えられたことは 有難い 念仏申す身になれたことは なお有難い

傘寿を迎えられた方が、「知らぬ間にこんな年になってしまった。歩行も困難になるし、新聞も読めない。酒もすっかり弱くなった。年は取りたくないものだ。」と言われる。長生きはしたいが年は取りたくない。こんな矛盾はない。人間はいつまでも若く健康でありたいと思うのですが、そんなことは有り得ない。若さはいつまでも若くはない。必ず老いる。健康はいつまでも続かない。必ず病気になる。生あるものは必ず死を迎えるのです。分かっているのにそれを自分の都合の良いようにしたいのです。それが迷いなのです。何事も自分の都合の良いようにしたいその心が苦しみを作るのです。

しかしその苦しき、迷い、悩みが仏法を聞かせていただく機縁となるようです。財力や権力をつかめば幸せであると思ひこんでいたが、結局金や権力によって泣かねばならない人生であります。

蓮如上人が「まことに、死せんときは、かねて頼みおきつる妻子も財宝も、わが身にはひとつもあいそうことあるべからず」(お文 一帖目 第十一通)と仰っておりますが、まさにその通りであります。

それでは本当に頼みとなるものはあるのでしょうか？親鸞聖人は「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろずのこと、みなもって、そらごとたわごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわします。」(歎異抄 後序)とお示し下されました。「ただ念仏のみぞまことにておわします。」とおっしゃられたその念仏の心を何遍も何遍も聞かせていただきますと、如来の本願が聞こえてまいります。他人のことはどうでも良く、自分の都合しか考えない自己中心の何とも情けない、恥ずかしい、恐ろしいこんな私をも、「心配するなよ必ず救うぞ。救わずにはおかない。」と誓ってくださる如来のお心がかたじけなない思いで聞こえてくるのです。ナンマンダブツ・ナンマンダブツと念仏申さずにおれなくなります。念仏申す身にさせていただくとき、迷う必要がなかった。唯この念仏の道を歩めば良かったと、浄土へ向かっての人生を歩ませていただけるのであります。しかし、相変わらず悩み、苦しきはなくなりませんが、お念仏を悦ぶ身にさせていただいた今、不思議に迷いはありません。往生安楽国への人生の旅を楽しませていただける思いであります。合掌

住職 高島利明

読者の広場

「本山報恩講と東本願寺派婦人会第1回関東大会」

平成18年11月28日、御本山東本願寺において東本願寺派婦人会第1回関東大会が盛大に催されました。記念すべき第1回大会に本弘寺婦人会より30名の会員の方々も参加させていただくことができました。

「感想」

大野 シツイ

昨年11月27日、東本願寺に宿泊させていただき、諸先生方のご法話を聴聞させていただきました。その法話の中で、私は孤独で独りだと勘違いをしていましたが、そうではなかった。如来様や親鸞様と自分はいつでも一緒にいたと気がつかされ本当に有難く、気がついたらお念仏を称えている私でした。生かされ生きている私は、日々の生活の中にお念仏の大切さがあることを心から感じました。仏法は体で聞き、また聞いたことは忘れても戴いたご縁は体や心に残るものです。日々何気なく過ごしていてもふっと思い出すことができると思いました。

翌日の28日朝7時から結願晨朝法要のお勤めが大勢のお坊様方ご出仕の元、広い本堂で始まり、お勤めの響きが有難く涙が止まりませんでした。命の有り難さを報恩講で気がつかせていただくことができました。合掌

滝井 江子

報恩講の御満座の板東曲に感動しまして、御法主台下、大御裏方様のお話しを聴聞させていただき、温もりの心で大会の会場である大谷ホールへ移動しました。会場へ入るとすでに席も満席状態で若い方の姿も多数目に入り嬉しくなりました。会歌「ひかりにふれて」は本弘寺の定例会では必ず斉唱いたしますので声を張り上げて歌わせていただきました。総裁様の暖かいお言葉のあとに講師の外松太恵子先生の記念講演があり、とても優しくソフトな語りでお話しをしてくださいました。自分の欠点を理解してくれて付き合ってくれる人がいると言うことは幸せなこと、御仏様はいつも私たちに光を与えてくださっています。感謝の気持ちを持って生きていきたいと思います。不平不満の私に語りかけてくださったようで、心が洗われる思いでした。お話しが終わってからほのぼのと暖かいものが心に残りました。合掌



今後のお知らせと予定

日付	本弘寺行事	婦人会行事
4月8日	午後1時より花まつり	午後1時より花まつり
6月20日	午後1時半より永代経法要	午前11時より総会
8月13日～16日	16日午後1時半よりお盆法要	仏花販売・お茶接待